

佐藤学の引用の続き

「学び＝まねび」は、文化の伝承と再創造という社会的過程を起源とし、その人間関係を基盤とする活動」である。同時に「学びは子ども一人ひとりが内側で構成する個別的な「経験」である」。ここでも模倣と創造性を対立させ、共同性と個人性を対立させる二元論からの脱却が要求される（[佐藤] p.39）。

数教協の中でも、このような教育思想、教育観についての議論が必要である。数教協の創始期にはそれがあった。現在はあまりにも停滞している。上の佐藤氏の言葉はヴィゴツキーの流れに沿っている。ヴィゴツキーの“科学的概念と生活的概念（自発的概念）”の区別は、近代以後の学校教育の意義を説明する。それは「進化心理学」における“生物学的に一次の能力、二次の能力”の対比に相当する。数教協の現場では、停滞の中で、ピアジェに由来する教育観が残っていて、（悪い）影響を及ぼしている。今日の認知心理学、脳神経科学（のまともな部分）にも学ぶべきだ。

[溝上1]の「学術的定義」

「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味でのあらゆる能動的な学習のこと。

能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」

（「学術的」と自称したから学術的になるわけではない。私には学術的とは思えない。溝上氏は「専門家以外は理解できる範囲でいい」と言うが、分からないものを「お経」のようにありがたがるのは止めるべきだ。）

(1) この定義は前半、後半の二つの文章からなる。前半の

A: 「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味でのあらゆる能動的な学習のこと。」

だけで「アクティブラーニング」の定義は完結しているように見える（「・・・のこと」と言っているのだから）。まず、学習について

「受動的な学習」＝「一方向的な知識伝達型講義を聴く学習」

と定められ、次に

「能動的な学習」＝「この受動的な学習を乗り越える学習」

とされる。これが「能動的な学習」の”意味”である。そして、

「アクティブラーニング」＝「あらゆる能動的な学習」

と定義される。「一方向的な知識伝達型講義を聴く」を「乗り越える」だけで、すべての学習が「アクティブラーニング」として認定されるわけである。

まだ「乗り越える意味での」という言葉の実際の「意味」がはっきりしない。

(2) 後半の文章

B: 「能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」

は、全体の中で何を意味しているのだろうか？ “事実を述べる文章”（declarative sentence, 平叙文）の形をしているが、これも「定義」の一部だとすれば、「能動的な学習」であるための

条件を述べ直そうとしているのだろう。それは「乗り越える意味での」を具体化することになる？

(2-1) まず、この文章は

「・・・」

= 「書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化」
として

「能動的学習には・・・を伴う」という構文になっている。

「能動的学習は・・・を伴う」あるいは「能動的学習には・・・が伴う」なら分かる。前者では他動詞「伴う」の（動作の）主体は「能動的学習」であり、後者では自働詞「伴う」の主体は「・・・」である。

しかし「能動的学習には・・・を伴う」については「を伴う」という動作の主体はなんだろう。（「今度の旅行には妻を伴う」ならば、伴うという動作の主体は隠れていてもはっきりわかる平叙文である。）

「・・・を伴う学習が能動的な学習である」、あるいは「能動的学習とは・・・を伴う学習のことである」のようなこと（能動的な学習についての条件）を言いたいのだろうか。ここには日本語リテラシー（読み書き能力）の欠如という問題がある。

(2-2) 「・・・」は前半

C: 「書く・話す・発表するなどの活動への関与」
と後半の

D: 「そこで生ずる認知プロセスの外化」

に分かれる。「能動的学習」はこの二つ「を伴う」のだ。

(2-3) Cにおける「書く・話す・発表する」は「活動」の例示である。[溝上 1] にとっての「活動」は外に向かう活動（外的活動）に限られている。

(Bonwell & Eison 1991 の中の“engaged in activities (e.g. reading discussing, writing)”では、溝上
が排除する「読む」が能動的活動として認められている)。

したがって「読む、聴く、考える」という内的活動は「活動」から除外されている。

本来は学習の中心であるはずの内化 (internalize) を除外し外化 (externalize) だけが [溝上 1]
では「能動的活動」なのである。

(2-4) D: 「そこで生じる認知プロセスの外化」は意味不明の文である。「そこで生じる」は
「認知プロセス」に係るのか「外化」に係るのか、構文の上では判断できない。

著者は「ただ聴くだけのときはあまり働かせていなかったさまざまな認知機能を働かせ」と
言っている。

「活動」つまり外的活動があるときには、それを支える「認知プロセス」が頭の中に自然に生じ
ている、

と、事実を指摘したいのかも知れない。このとき、

「書く・話す・発表するなどの活動を行うことは、頭の中で考えたこと（認知プロセス）を外化
させることに他ならない」

という言葉はその延長であり、DはCの繰り返しに過ぎない、ようにも読める。

しかし、溝上慎一「大学教育におけるアクティブラーニングとは」(2016/12/14, ネット上 [溝
上 5]) では、

「要は活動だけでなく、それに伴って頭も働かせることをALのポイントとする」

という文がある。

”形だけの活動はあるが頭は働いていない空虚な授業” が実際には多い、
という認識のもとに、「頭の中も働かせていること」を ALすなわち「能動的学習」の条件として追加したのかも知れない。

結局、何を言っているのか、私には全く理解できない。事実を述べているのか、条件を付けているのか、著者は互いに矛盾する二つの要素を一つの文章に込めようとしている？ これで「学術的定義」とは。（2月4日のパネルディスカッションの討議では、「溝上氏は理解した上で、意味不明の文章をわざと書いているのだ、という弁護の意見があった。）

(2-5) 文 B における「伴う」について：「伴う」とは本体の”横にある存在”を示す動詞である。「書く・話す・発表する」は、そして「認知プロセスの外化」は、溝上氏の「能動的な学習」の中核的な構成要素ではなくて、少しでもこれらが付随していれば、「講義を聴く」中心の授業もすべて「アクティブラーニング」となる。

これは変だ、と思ったが、「・・・を乗り越えるという意味でのあらゆる・・・」という変な「定義」にこの「を伴う」はふさわしい、とも言える。

(3) 「書く・話す・発表する」も「認知プロセスの外化」も外的活動である。「アクティブラーニング」は外的活動だけに着目している。したがって、学習論としては極めていびつな存在である。溝上氏自身が

「AL だけで学習の質まで問い、それでALを問題視するという発想の構造がおかしい」と言っている。「学習の質」が教育において本質的と考える我々の側から言えば、それは

「アクティブラーニング」の旗を振るのはいい加減に止めたら

ということになる。構図 A の AL は賞味期限を迎え、構図 B への移行を余儀なくされている（[溝上 1] p.186）というが、彼の「学術的定義」

「・・・を乗り越えるという意味のあらゆる・・・」

は構図 A そのものではないか。つまり、溝上流の「学術的定義」はすでに「賞味期限を迎えている」ということだ。

中教審「答申」（2016/12/26）からの引用

「第7章 どのように学ぶか」から気に入った言葉を拾いだすと：

学校での学びは個々の教員の指導改善の工夫や教材研究の努力に支えられている。

学習活動を子供の自主性だけに委ね、学習成果につながらない「活動あって学びなし」と批判される授業に陥ったり、特定の授業の型にこだわるあまり、指導の型をなぞるだけで意味のある学びにつながらない授業になってしまったりという恐れも指摘されている p.48

「ともすると本来の目的を見失い、特定の学習や指導の「型」に拘泥する事態を招きかねないのではないかと指摘をふまえての危惧」

「アクティブ・ラーニング」の視点については、深まりを欠くと表面的な活動に陥ってしまうといった失敗例も報告されており、「深い学び」の視点は極めて重要である」

「学びの「深まり」の鍵となるのは、各教科などの特質に応じた「見方・考え方」である」

答申の「概要」においては：

「特定の指導方法のことでもなければ、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。」（意図性とは教師と子どもの関係における教師の側の能動性）

「教員が「教えることにしっかりと関わり」、・・・絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。」

答申についての溝上慎一氏のコメント (2017/01/12 前後 , ウェブサイト)

(答申の文章が)「深くて、主体的・対話的な学び」となっておらず、「主体的・対話的で深い学び」となっていること(「深い学び」が最初でなかったことに)に大きな意味がある」

「”深い学び”を加えたこと(により起こりうる)負のインパクトは、深い学びが先に来て、主体的・対話的な学びが後回しになること」(内容的に「深い学び」の方が「主体的・対話的な学び」以上に重視されること。)

「“主体的・対話的”と”深い学び”の順序が逆転するようでは、「今回の改定の苦勞は、高校のチョーク&トークを主とした講義一辺倒の授業を変えられないという意味で、水の泡と化する」

「ALの多くの論者が第一義としてきた「講義一辺倒の授業の脱却」が(今回の答申では)明示されていない。「講義一辺倒の授業の脱却」を第一義としてALが主唱していたことを、今一度確認してほしい」

このように溝上氏は中教審答申への不満と危惧を述べている。

一方で溝上氏は、自分の学術的定義「アクティブラーニング」と中教審・文科省の政策的定義「アクティブ・ラーニング」にそれほどの違いはないとも言う。

「私のALには「深い学び」は含まれないが、私の定義のAL(活動への関与と認知プロセスの外化だけで定義される)をしっかりと行っている学生は、実質的に「深い学び」にいたっている、そうでない学生に比べて学びが深い」

あるいは

「学習の浅いアプローチしか求めないようなもの」=「伝統的な講義のようなもの」
したがって、

「講義一辺倒の授業を聴く」=「浅い学び」

であるから、

「それを脱却する」=「深い学び」

ということになる。

「「深い学び」は言わなくても「アクティブラーニング」に含まれていた。」

このようにも溝上氏は弁明している。

一方で、「深い学び」の強調で「AL主唱者の努力は水の泡と化す」と言い、他方で「我々のALこそ「深い学び」であるという。支離滅裂、という感じがする。

(溝上氏の「定義」を長々と検討するのは、つまらない虚しい作業である。しかし「カタカナ語教育学ムラ」の権威をつぶす(人々に呪縛から醒めてもらう)には、これは避けるわけにはいかない、と考えた。)

「アクティブ」の曖昧さ

辞書 [OALD] (Oxford Advanced Learner's Dictionary)

で active を引くと、第一の意味として

always busy doing things, especially physical activity

(絶えずせわしなく何かしている、特に身体的活動)

がある。まるで ADHD (Attention Deficit Hyperactivity Disorder, 注意欠陥多動障害) のようである。

[OED] (Oxford Dictionary of English)

では

engaging in physically energetic pursuits
(身体を精力的に動かして何かに没頭すること)

が第一の意味である。

「ジーニアス大英和辞典」で active を引くと、

「(思索的に対して) 活動的な」

が第一の訳語である。

(忙しく身体を動かす意味での active に対比されるのは「思索的」だが、それは「注意の集中」と重なる。注意の集中は学びの成功の必須の条件であるが、集中とは脳の active な範囲(グルコース消費で赤く染まる範囲)の制限に等しい。集中と活動はこの意味では対立概念であることに注意したい)

active についての、このような辞書の第一用法 busy が、実は「アクティブラーニング」のアクティブに近い。それは内面での深化、充実、広がりなどでなく、パフォーマンス、演技、外側の装い、見せかけ、フリをする、に墮する危険が常にある。

今日の active は大変多義的な単語で、第2の用法として inactive (休止中) と対比される active がある。off に対する on, 非活性に対する活性の意味である。

第3の用法として、passive (受動的) と対比される active がある(これは「能動的」と訳される)。A (先生) が B (生徒) に強制して C という活動をさせるとき、A は active であり、B は passive である。

しかし、B が active でなく passive であっても、C という活動で忙しい (busy) という意味では active である。このような passive な activity も「能動的」と括ってしまうような用語法は正しくない。受動的でない自発的な活動は能動的と呼んでいいだろうが、[溝上 1] の「学術的定義」に言う「能動的な」は正しい用語法から外れている(受動的な活動がたくさん含まれる)。一方では、すでに述べたように、[溝上 1] の「アクティブ」は教育の本質的部分、中核の部分であるところの知識・技能の獲得(内面化)の活動を排除している。この特殊で恣意的な用語法のおかげで

「アクティブラーニングはアクティブなラーニングではない」

という無様な言い訳になってしまった。

(ネット上では、多くの「学者」が一般人(素人)を見下しながら、このセンテンスを自慢している。)

今回の、全国研究会議の後に公表された「学習指導要領」では、最大のキャッチフレーズ(魔法のことば)であった「アクティブ・ラーニング」というカタカナ語が消えた! 「意味がはっきりしない文言は公文書に使えない」そうだが、「アクティブなラーニング」でも曖昧なのに、「アクティブなラーニングでさえない」となると、文科官僚が「要領」に書き込むのに躊躇する気持ちはわかる気がする。

(付記: 2017/02/04 の数教協「全国研究集会」@和光小学校(世田谷区)で、「カタカナ語教育学と文科省支配(2)」に添えて配布した。「カタカナ語教育学と文科省支配(3)」の先取りではなく、(2)の書き残し。)

(2度目の付記(2017/02/23)。 配布文書(02/04)に「書き残し」をさらに加え、ページ数が1増えた。その他に、文意を明瞭にするための修正・加筆をした。)